

ネーミングが持つ力

中西和代

初めてのたまごクラブ編集長

私は 20～40 代の女性（妊婦）を対象にした雑誌編集に 18 年間関わってきたが、最近の読者の特徴としては、

- ★妊娠・出産・育児に対して危機感の薄い人が増えた（なんとなく大丈夫と思いこんでいる）
- ★言われないとわからない、言われたまます直に受け取ってくれるが、深読みはしない
- ★自分なりの答えをじっくり考えるより、OK か NG かすぐにわかるものを好む

例えば以前ならば、出産がテーマの特集タイトルも

「これで安心！ 出産まるごとガイド」のように大きくくりでよかったのだが、最近は、

「～おしるし、前駆陣痛、破水、陣痛乗り切り、いきみ～ 出産を上手に乗り切ろうガイド

失敗したママのここに気をつけて体験談も満載！」

といったように、内容をすべて説明しないと具体的にイメージしてもらいにくい。

こういった層に何か訴えたいことがある場合は、的確なネーミングでアピールすることは、大変効果的といえるだろう。近年マスコミがとりあげた妊娠・出産・育児関係の代表的なネーミング例をいくつか挙げてみよう。

- ◆公園デビュー：散歩で公園に行き、ママ友づくりを始めること。
- ◆授かり婚（できちゃった婚）：妊娠をきっかけに結婚すること。
- ◆育メン：育児をするメンズ、育児参加しているパパのこと。
- ◆産後クライシス：出産後に夫婦関係が微妙になること。

これらはいずれも、現実にある程度“心当たりがある”人が増えた段階で、絶妙な名前が与えられたことでさらに共感と呼び、人々の印象に残って定着していったものである。そしてその名前が市民権を得るとともに、それが表す事象も世間にとって珍しくない存在となっていった。

例えば「揺さぶられ症候群」なども、ネーミングされたことで、さらに一般に強く注意喚起できるようになったもののひとつといえよう。

もしこれについて雑誌の記事に出す場合、

A) 赤ちゃんを強く揺さぶると脳にダメージを受け影響が出る危険があります

B) 赤ちゃんを強く揺さぶると脳にダメージを受け「揺さぶられ症候群」になる危険があります
--

A よりも B の方が、強く揺さぶって赤ちゃんが脳にダメージを受けたら、「何か大変なことが待っていそう」と読者の印象に残りやすい。また「揺さぶられ症候群ってなんだろう？どんな影響があるのだろうか？」と興味を引きやすい。これがネーミングが持つ力といえる。

インターネットの普及で、気になることはすぐに検索してスピーディーに答えを得ることに慣れている世代を相手に、より広く認知してもらいたい事象がある場合、長々と説明するのは効果的とはいえない。わかりやすく印象に残るネーミングをすることで、「○○って、知ってる？」と話題にあがりやすくする方が近道といえるのではないだろうか。

一方で、ネーミングの際は注意したいこともある。

記憶に新しいところでは、「カンガルूケア」は本来 NICU で行われていたものが一時期一般に広まったが、安易に行われるようになった弊害から事故が発生したことで、注意喚起のため親しみやすい「カンガルूケア」から「早期母子接触」に名称変更がなされた。

先に例に挙げた「揺さぶられ症候群」も、「揺さぶられっ子症候群」ともいうが、弊社編集部では「～っ子」というどこかかわいらしいイメージのある語感が、この虐待にも関係する症候群の名にはふさわしくないと考えて、「揺さぶられ症候群」で統一している。

医療関係の言葉のネーミングについては、親しみやすさを重視したアプローチでは弊害が起こる可能性があることを、常に心に留めておきたい。

今も昔も、ママ（妊婦さん）の関心の一番が赤ちゃんであることに変わりはない。わが子に元気で生まれて、将来もずっと健康な生活を送ってほしいと願う気持ちはいつでも同じである。

「DOHaD」に適切な日本名称がネーミングされて、ママ達の願いを叶える一助になることを期待するものである。

【略歴】

学歴

1991 年 3 月 昭和女子大学文学部卒業

職歴

1991 年 4 月 国文学専門出版 桜楓社入社

1996 年 4 月 編集プロダクション風讃社入社 たまごクラブ編集部配属

2006 年 7 月 たまごクラブ編集長就任

2011 年 4 月 初めてのたまごクラブ編集長兼務

2012 年 4 月 初めてのたまごクラブ編集長専属